再認する生——『物質と記憶』再読

Vie qui (se) reconnaît — une lecture de *Matière et mémoire*

杉山　直樹

Naoki SUGIYAMA

はじめに[1)]

私たちがここで論じるのは、純粋知覚や純粋記憶ではなく、むしろ日常のありきたりな生の相貌、「混合体」としての生である。問題なのは、直観ではなくて分析であり、差異の貫徹ではなく同一性の支配である。以下の私たちの主張は簡単にこう要約できる、「私たちの生はおおむね不純なものである」、と。『物質と記憶』は、そうした「不純 impur」(cf.MM234) な生についての、ほとんど完璧とも言える驚くべき記述を私たちに与えてくれている。

そのような記述を扱うことにどんな意味があるというのか。不純な混合体である私たちの日常の生の与件を、純粋な諸傾向へと微分してみせる鮮やかな手つきにこそベルクソン哲学の本領があったのではないか。それにも関わらず不純な混合体を採り上げるのはなぜか——こう問われるかもしれない。最初にその点について少しだけ述べておきたい。

心理学と形而上学の関係というトピックは19世紀において「哲学」のステータスそのものにまで関わる重要なものであったが、ベルクソンにおける両者の関係は次のように要約されよう。すなわち、一方で心理学とは、この世界において行為し生きていかねばならないという根本条件のもとでの、その限界内における私たちの（縮減された）生の記述であり、それに対して、形而上学——つまりは真の哲学——とは、私たちの生がそうした条件を超出し、純粋な創造力としておのれを把握し直す営みなのだと（MM167)。心理学はベルクソンにおいては形而上学への助走、それを何らかの形で延長すればそのまま形而上学に至る道であるだけではなく、それと併せて一種の「否定の道」ないし「浄化の道」の性格を有していたわけだ。だとすれば、直接「純粋な創造力」とそれに関連する肯定的・積極的諸要素を顕揚することと、そこに辿り着くためにいったんは踏まえるべきであろう「不純な」否定的・消極的諸要素をそれなりに丹念な仕方で考察することとは、結局は同じ活動の二側面であろう[2)]。そして私たちは、ここでは後者の作業にもっぱらたずさわろうというわけだ。したがって、本論も考察の最後にはベルクソン固有の積極的な主張に辿り着く。しかもその時には、その主張は、単にそれとして端的に叙述される場合と異なり、それが浮き出てくる地を与えられ、いっそう判明な姿を具えるに至っているはずだ。そうした判明化の期待に本論は導かれている。

1）本稿は第7回ベルクソン哲学研究会（2000年3月、於慶応義塾大学）において発表された原稿に加筆訂正を行ったものである。

2）「自分自身を把握し直すためになさねばならない努力の精確な方向を決定できるようになるのも、まずは経験的な仕方で、精神の生に身体の生がもたらす限定 limitation が特にどういった種類のものであるかを研究することによってです」(M493) ——通常の生は形而上学的な水準と連続している、それゆえにかえって両者を隔ててしまっている「限定」の見極めが重要になるのだ、という主張。

ベルクソンからの引用、参照は頁数を全集版のそれで示す。著作略号は通例に従う。Mは*Mélanges*である。なお［］内は引用者による補足・註記である。

また本論は『物質と記憶』という著作の読み直しという意図をも持つものである。なぜ『物質と記憶』は再認 reconnaissance を論じるのか。ベルクソンの著作にいささかでも馴染んだ者にとっては初歩的な問いだ。再認は「記憶力の実践的でしたがって通常の ordinaire 働き、現在の行為のために過去の経験を用いること」(MM224) としてまずは登場する。再認とは、現在と過去との接触ないし結合、「過去と現在とが互いに触れ合うに至る漸進的運動」(MM367) なのだ。『物質と記憶』の構図を単純化して言えば、「現在」とは第一章で記述された物質的世界ならびにそこに含まれる限りでの身体をその時間的性格から規定する語であり、そして「過去」とは当然記憶を、そしてそれを含み込む精神を、さしあたりは、含意するものであるだろう。つまり、再認という現象は心身関係の具体相という資格で議論に登場してくるわけだ。再認の過程ならびにその障害を記述することを通じて、過去の記憶の独立性を論証し、脳の役割を限定し、身体に還元されない精神の実在を立証すること。これが『物質と記憶』第二章、そしてそれに続く第三章の目的となる。そのためにベルクソンは、まず再認のメカニズムについて叙述し、身体ないし脳の損傷が影響を及ぼすのがそのメカニズムのどこであるのかを問い、いずれにせよ脳の損傷は記憶を破壊するのではなくただその想起を阻害するのみなのだと結論づけ、記憶の脳における局在を否定することと併せて、もって脳に対する記憶の余剰ないし独立性――より形而上学的な表現をするなら、身体に対する精神ないし魂の独立性――の主張根拠となす。後に言われる「実証的形而上学」の一つの礎石がここに用意されたと言ってもよい。「再認」という現象は、そうした最終的な主張を行うためにベルクソンが選択した通路に過ぎないことになるわけだ。

全く正当な読みであろう。ベルクソン自身、何の異議も唱えないはずだ（シュヴァリエによる解説書へのベルクソンの反応を見れば、それがただの推測ではないことが分かる)。その上で私たちがここで行おうとするのは、そうしたスタンダードな、しかし閉鎖的な解釈に付け加えて、別の、しかしそれなりに然るべき文脈を用意し、そうすることによって再認論にさらに高い理論的価値を配分すること、あるいは少なくとも再認論に対する以上の視点をさらに多重化すること、このことである。再認論には、さらに興味深い多くの含意があるはずだ。それは一つには、いわゆる「観念論」が多かれ少なかれ「再認」というシェーマの上に成り立っているからという一般的事情のゆえである。「再認」の問題は、ある哲学がいかなる思想であるのかをあからさまに示してしまう一つの特権的試金石をなすものなのだ。そしてまた、この問題を扱うことを通じて、ベルクソン哲学の読みという作業の内部において得られるものも少なくないはずである。だがその主張の当否は以下の議論に委ねられなければならない。

以下、「再認する生」についての記述を試みる。やがて明らかになるが、事象そのものが奇妙な時間性における一つの円環をなしている。以下の論述がその円環をほぐしつつぎこちない螺旋を描いて進むということには、単に便宜的な理由しかない。

再認する生　1

――私は一挙にイマージュのただ中に存在する。それはまだ「イマージュ」というにはあまりに質に乏しく、またほとんど分節されていない膨大な諸変様や擾乱、緊張やエネルギーの変化でしかない。それは基体なき波、基体なき運動であり、固定した対象として捉えられるものではいっさいない。捉えようのない生成。「現在」と口にする余裕も与えず、把握可能な「現在」といったものから絶えず逃れ去り逃れゆく生成。「現在」なき生成、アイオーン。

緊密な相互作用の拡がりのただ中に非決定性が導入される。過剰な水分を含んだ土地に足跡をつけるとたちまちその窪みに水がにじみ現れるように、それ自身は既に自己現出の力能を具えつつも中和化されていた過飽和的全体の中で、「非決定性の地帯」に意識的知覚が現出する。それは導入された非決定性に由来しながら、逆に「反射」[3] する形で、当の非決定性の内実を「鏡 miroir がなすごとく」（MM 172）測り、示唆し、描き、表現し、象徴化し（mesurer, suggérer, dessiner, exprimer, symboliser...）つつ露わにするだろう。意識的知覚と私の非決定性とは、「厳密な比例関係 exacte proportion」（MM 183）にある。再認する生の、ミニマムな位相。

秩序――「外的」世界

私とは区別される世界が存在すること、これは『物質と記憶』の根本主張の一つであった。観念論（バークリ的観念論）への批判。その主張そのものにはさして問題はないし、またそのような形でのみ述べられればそもそもそれは大して意味のない命題であろう。確認すべきはむしろ、いかにして、そしていかなる意味において、それが主張され得たのかという点でなければならない。

さっそく注意したいが、ひとつ興味深いのは、例えばビランにおいて特権的なファクター、そしてまたデカルトも議論の一契機として使用したファクター、すなわち「抵抗」や「強制」といった受動的な体験をベルクソンがそれほど重視していないことだ[4]。私の意志に反するだけでは、あるいは意志に対して抵抗するだけでは、「外的世界」にならないわけである。ではベルクソンが着目するのは何か。彼が世界の「外在性」の本質的ファクターと見定めるところのものは何か。

私たちの見るところ、それは「秩序 ordre」以外のものではなかった。このことは、ベルクソンによる観念論批判の大筋を振り返れば簡単に確認できる。観念論に対する彼の批判は基本的に、観念論には説明できないことが多すぎる、という形を採る。何と言っても観念論にとって不利なのは、「科学が存在する」（MM177-178）という事実、つまり科学の事実上の「成功 réussite」（MM179）があるということであった。言い換えるなら、現象には一定の秩序があり（科学はその秩序を顕在化し精緻にする営みとして考えられている）、そしてその秩序は観念論からは説明できないわけだ。『物質と記憶』の中でも最もはっきりと観念論――すなわち、外的世界は主観的感覚へと還元できるという説―

3）réfléchir, réflexion, réflecteur. cf. MM186, 187, 197, 204, 205, 212.

4）この点に関しての、ビランに対するベルクソンなりの「批判」については、*Cours II,* pp.335-336. を参照。そこでベルクソンはビランの「抵抗」をただ単に身体的感覚と解釈し、それが他の諸感覚と本質的な差異を有しないものなのではないかと問うことで、ビランにおいて「抵抗」が有していた固有の開示力を否定するに至っている。「努力の感情」というものに関する批判的見解についてはMM331 も参照のこと。ベルクソンとビランの関係を論じる場合、こうした断絶を軽視すべきではない。

—を論駁する箇所の一つ（MM209-210）においてベルクソンは、いかなる問題の前に観念論がその無力を晒してしまうのかを畳みかけるように列挙している。(1)いわゆる網膜像の綜合の問題——「別個のものとされる二つの感覚がいかにして融合して、空間の一点と我々が呼ぶところのものに対応する唯一の知覚になるのか」。(2)感覚の延長性獲得と位置づけの問題——「感覚が延長に結びつく過程、ならびに要素的感覚がそれぞれ空間の特定の位置を占める選択、これらは説明されないままである」。(3)他の感覚との綜合の問題——たとえば視覚と触覚とは質の上では共通するものがない以上、「視覚的延長と触覚的延長の対応を説明するのは、視覚的諸感覚の秩序［系列順序 ordre］と触覚的諸感覚の秩序との間の平行関係 parallelisme でしかありえない」。しかしこの平行関係が存在するということは、結局視覚系列・触覚系列のいずれか一方だけによっては説明できないある共通の秩序の存在を認めることである。「となれば我々は、視覚的感覚と触覚的感覚のほかに、両者に共通で、したがって両者から独立したある一つの秩序を想定しなければならなくなる」。(4)公共的世界の成立の問題——この独立の秩序はさらに、「すべての人間に同じように現われる」ものであると同時に、「そこでは結果が原因と結びつけられ、諸現象が法則にしたがっている一つの物質界を構成する」ものである。別の言い方をすれば、外界は単に私にとってのみ存在しそのことによって規定されているような何かではなく、まずはそれ自身において存在し、それ自身因果的に規定されている——私たちへの現われはその一局面に過ぎず、だからこそ種々の観点は統合されうる[5]——と考えられている事実がある。

ベルクソンの用いるロジックは明らかだろう。(1)から(4)までの諸論点いずれにおいても見られる主張は、異質な複数のセリー（複数の諸感覚、複数の意識など）がそこにおいて統合されてくる一定の「秩序」が私（たち）には現に与えられているのだという事実確認であり、そしてその存在根拠を問い返すならそこには非観念論的な「実在」が要求されてこざるを得ない、という形のものである[6]。ベルクソンに言わせれば観念論は、秩序だった外界を、あるいはより正確に言えば外界の「外在性」の意味であるところの「秩序」を、どこかで前提としないで済ませられるものではない。遅かれ早かれひとは「幸運な一致、予定調和」（MM198）にすがらざるを得なくなるだろうが、それらこそきわだった「秩序」のことなのだから、ひとはそれによってこれから構成されるべき「外界」を密輸入してしまっているわけで、そうしたものに訴えることはもちろん当初の出発点の放棄でしかない。諸感覚の由来から始まってそれらが「他でもなくむしろある一定の秩序」を有する理由、「安定し、すべてのひとに共通の経験」が成り立つ根拠、それらのものを観念論は述べることができないわけだ

5）「私の経験と他人たちの経験に共通 commun で、また諸対象との関係で自然法則と呼ばれる撓めがたい規則に従うところの、安定し stable 固定化した対象」（MM198）、「安定し、すべてのひとに共通の経験 expérience stable, commune à tous les hommes」（MM365）といった並列表現にも、ベルクソンにおける「秩序」と「共通性」の関連を読み取ることができよう。ちなみに、主観性を脱するその通路として必然的秩序というファクターに着目するこの種の発想については、さしあたりラシュリエを経由しつつ、少なくともカントにまでは遡ることができる（ラシュリエ：諸現象の必然的決定は「物質界の現実存在そのものであるばかりでなく、他の諸精神の現実存在に関して与え得る唯一の基礎でもある」J. Lachelier, ***Du fondement de l'induction,*** 1871 / Fayard, 1992, p.48. cf. ***Cours de logique*** (***1866-1867***), Editions Universitaires,1990, p.124 et sqq. カント：「客観的妥当性と必然的普遍妥当性とは交換概念である」I. Kant, ***Prolegomena,*** §19.）。

このタイプの議論の有効性と限界はそのまま『物質と記憶』のそれであることに注意すべきである。

6）論点別にいくつかの箇所の頁数を列挙すれば次の通り。(a) 感覚が空間的拡がりを獲得すること: MM189,196,198, 201-203,210,348-350. (b) 諸感覚がある統一体に纏めあげられること: MM189,198,210. (c) それがある秩序を有していること: MM177-178,189,210. ——ベルクソンの議論において、以上の諸事実はそれぞれ、それによって私たちが物質の「実在」を認めざるを得なくなる種類のものだ。

(MM364-365)。「観念論は知覚において現れる秩序から科学において成功する秩序へ、つまり実在へと、移り行くことができない」(MM361)。だからベルクソンは言う、「したがって donc、最初に措定されねばならないのは、純粋知覚、すなわちイマージュなのである」(MM365) ――この「したがって donc」こそが、『物質と記憶』のいわゆる「イマージュ」論の歩みすべてを支え、正当化する。この「したがって」と共に、ベルクソンは、非延長的な諸感覚のみから出発するという考察方法を捨てたわけだ。感覚に対して「外的」世界は還元不可能な余剰を持つのであり、そしてその余剰、感覚に還元されない「実在性」とは、「秩序」のことなのだ。「客観的で我々とは独立した秩序、すなわち感覚とは別個の物質界 d'un ***ordre*** objectif et indépendant de nous, c'est-à-dire d'un ***monde*** distinct de la sensation」(MM210, 強調引用者) といった等置表現も想起されよう。

単に与えられること、単に意のままにならないことだけでは、いまだ「外的世界」の本質的契機は欠けたままである。知覚されつつも一定の秩序において与えられるものでなければ、「実在」ではない[7]。この観点からすれば、抵抗すら、先行する秩序によって規定されている。その秩序との関係で、私の意志も抵抗に遭ったり遭わなかったりするし、かつその関係においてそのつどの抵抗も具体的な規定を受けるのであり、そもそもそうしたものでなければその抵抗はただの黙せる抵抗に留まり、外的実在を構成はしないのだ。『物質と記憶』の出版直後から、ベルクソンのこうしたある種極めて主知主義的な前提を的確に指摘していたのはデルボスであった――ベルクソンの考えにおいては「イマージュの知解可能性 intelligibilité は、イマージュの実在 réalité の条件なのである」[8]。こう言い換えてもよいだろう、外的世界の構成部分として実在するイマージュとは、知解可能なものなのである、と。知解可能性と実在性とのこの密接な繋がりをまず押さえておこう。

7）付言するなら、以上の論点は『物質と記憶』の途中で初めてそれとして示されるものの、実質的には第一章冒頭から実質的には機能している。最初から突然導入される「イマージュ」にさっそく与えられているのは、まさに次の二重の規定であった (cf.MM169)。そしてこれは、後の議論全体を完全に支配する、本質的な規定である。

(I) その時々に現前している当のものである（« Me voici donc en présence d'images...»）。

(II) それら相互の間で、恒常的な法則に従って作用しあっている（« ...selon des lois constantes, que j'appelle les lois de la nature...»）

後の第7版序文でベルクソンが説明し直したこと (cf.MM161-162) はこの二つの点の言い換えに過ぎない。

(I') 生彩に富んで pittoresque おり、色や抵抗などの可感的諸性質を持っている。

(II') 我々とは独立した、それ自身における存在である。

また、『物質と記憶』の第三章で示される、経験的な意味での「存在」の満たすべき要件 (cf.MM288) においても、全く同じ二重性が見てとられるはずである。

(I") 意識への現前

(II") 論理的ないし因果的連結

第一の規定（現前性）は観念論側の主張につながり、第二の規定（秩序）は実在論側の論拠になるものだということは明らかだろう。以下この二つの規定はさまざまな形で議論の要を構成し、ベルクソンの議論を導いていくことになる。『物質と記憶』の知覚論は「あらゆる理論・議論」を忘れて (cf.MM169) 始まっているわけでは決してないのだ、と指摘するユード (H. Hude, ***Bergson II,*** Editions universitaires, 1990, p.22 et sqq.) に対しては、私たちも同意しなければなるまい。実際、(II) の規定を述べるためには、いかに多くの前提が必要とされることだろうか――そしてベルクソンは最初からこの規定を前提とすることで、観念論的傾斜に議論が引き込まれることを拒否しているのだ。物質・知覚論に関する限り、『物質と記憶』の冒頭の数行において本質的議論は既に終わっているといっても過言ではない。

なお、観念論と実在論との間でのベルクソンのこうした位置取りそのものは、遅くとも、『講義録』第二巻所収の「形而上学講義」が行われた1893年には既に確立している。

8）V. Delbos, "Etudes Critiques, ***Matière et Mémoire*** par Henri Bergson", in ***Revue de mètaphysique et de morale,*** 1897, p.385.

秩序づける身体

いかにして自然は可能か、という問いを立てたのはカントだが、彼の答は二重であった。質料的な意味での自然が可能なのは、時間と空間の形式を有する感性が触発されるからだ。しかしもう一つの重要な意味においては、自然とは「必然的規則、すなわち法則に従った形での、現実存在に関しての現象の連関」のことであり、その意味の自然に関してはカテゴリーがその可能性の条件をなしている。

さて、依って立つ観点に大きな相違があるとは言え、主張されている内容においてそうしたカントとベルクソンとの距離はさほど大きなものではない。逆説を弄しているのではない。第一批判のカントにおいて、「自然」はカテゴリーによって形式化された感性的所与から構成されているように、それと全く同様に、ベルクソンの「イマージュ」も、感性的に与えられ、かつ、ある法則に従ったものだとされていることは、以上の確認から既に明らかでなければならない。

ただ、カントにとっては後者の法則性の事実それ自体がさらに追求され根拠を与えられるべき一つの問題を構成していたのに対し、少なくとも『物質と記憶』のベルクソンにとっては、その種の問題はまだそもそも立てられていないように見える。おそらくは、その点に関する本格的な考察には『創造的進化』を待たねばならないだろう。『進化』において初めて、どうして「空間性」において精神と自然が相互に適合するのか、すなわちいかにして「秩序」の成立は保証されるのかが、ベルクソン的な仕方で論じられるのだから。言い換えれば、世界の法則的秩序についての「権利問題」は『創造的進化』にまで延期され、『物質と記憶』の時点ではむしろ「事実問題」がもっぱら扱われているわけだ。しかしそれは必ずしもまずいことではない。というのは実際、『創造的進化』が語る「秩序」は、極めて一般的なもの、「空間性 spatialité」だけなのであり、それは言ってみれば具体的な個々の諸法則がその上に描かれ得るその前提となる原形式といったものに過ぎないのだ[9]。そしてそうした「空間性」だけでは、客観的世界の構成には足りない（それだけでは幾何学の対象、あるいは夢をすら厳密には排除できないはずだ）。客観的世界の骨組みをなすだろう法則的諸秩序は、『創造的進化』が保証するそれより具体的に規定されたものであり、そしてそのレベルを記述しているのはむしろ『物質と記憶』なのである。もちろん具体的な諸法則は多様であり、またその集合が一義的に決定されているわけでもない[10]。しかし大きく括れば、それは「因果性」と呼ばれる種類のものであるこ

9）Theau はたぶんその点を誤解している（おそらくはベルクソン自身にもその誤解の原因を帰し得るだろうが）。彼は述べる（J. Theau, ***La critique bergsonienne du concept,*** Privat,1967）――「しかしもし我々が事物のうちに存在する一定の規定や類似、一定の関係を把握することができるのであれば、そもそも事物のうちに判明な諸規定が、しかも類似や関係によって互いに結ばれたものとして、存在していなければならない」（***ibid.***, p.570）はずだ。「しかしそうした諸規定が、単なる等質性と空間性への下降運動によって物理的実在のうちに置かれるなどということがいったい可能だろうか？」（***ibid.***, p.571）。それなのにベルクソンはそうした誤った主張を行っている、少なくとも自分の議論に不当な射程を与えてしまっている――これが Theau の診断であった。確かに、彼が指摘するように、空間性を用意しただけでは、諸法則はまだ何ら規定されない。「空間はその本性によっては何も生まず、構成せず、規定しないのである」（***ibid.***, p.572）というのは、事実だ。しかしかえって私たちはそうした当然の主張に照らして、『創造的進化』第三章での議論の本来の射程を再確認しておくべきだろう。まさかベルクソンとて、空間性さえ把握すれば物理的な諸法則がすべてそれで把握されるなどとは考えまい。しかし空間性がなければ、いかなる法則性も適用できないはずであり、ベルクソンが与えたのはその点の保証、カント的意味での「演繹」にも似た主張だったのではないか。

実際、カントにおいても、その第一批判が保証する自然の必然的法則は、それが「自然」を根底的に規定するものであるとは言え、むしろそれゆえに、個々の法則について教えるものでは（ほとんど）ない。個々の法則はもちろんのことながら実験的科学の作業において、反省的判断力を通じて経験的に探求されるべきものだったのである。

10）***Cours II,*** p.337 以下を参照。「外的世界」の規定は一義的でなく、その内部に「複数の契機」を有している。

とになると言っても大過ないだろう[11]。具体的に、因果的諸秩序が「どのように」与えられ、機能しているのか。問題はさしあたりここにある。

1900年の国際哲学会における発表、「因果律への信憑の心理学的起源についてのノート」は、まさにそうした形で問いを立てていた――「因果律はどのように comment 構成され、通常の知性に対してどのように現れるのか」（M420）。簡単に振り返っておこう。「通常の知性」にとって因果律は(1)継起的諸現象間のみならず併存する現象間にも立てられる、(2)必然的でも偶然的でもある、(3)外的現象、内的現象双方に等しく適用される、(4)経験的所与でもあり、同時に思惟の要求でもある、といった諸相を有するものである。ここにはヒューム、カント、ビランたちへの批判が伏在しているが、それは措く。これまで哲学者が考えてきたよりも、「因果性」は言わばより柔軟で融通の効く概念なのだ。さて、どこからこのような非常に外延の広い概念が与えられるのか。ベルクソンの答を一言で言うなら、「共働化＝共秩序化 coordination」の経験――「私の生と外延を等しくする、生に本質的な」（M423）体験――から、ということになろう。何の共働化か。異質な諸感覚、代表的には視覚印象と触覚印象（運動を伴うそれ）の間での共働化である。「特定の視覚的形態が現れた時には、特定の［対応する］触覚印象を予期する attendre 習慣が形成される」（M424）。諸印象と運動とのこうした関係、「感覚-運動的 sensori-moteur」な連合関係が、「因果律」の基盤をなしている、というわけだ。

『物質と記憶』に戻って、以上の非常に簡明な主張の含意をいくらか展開しておかねばならない。今語られた「共働化」とは、『物質と記憶』が「感官の教育 education des sens」と呼んでいたものと別のものではない。「感官の教育」とはまさしく、「感覚諸印象と、それを利用する運動の間に成立する繋がり connexion の総体」（MM240）、つまりは感覚-運動的連合だったのだから。「共働化」が成立するということは、そうした意味の「感官の教育」が成功しているということでもある。異なるものの間の因果関係という紐帯が、最初に身体の感覚-運動的活動において知られるのと同様に、異なる諸感覚の間の共通性を最初に告げるのは、これまた身体の「感覚-運動」的活動である。そしてさらにこのメカニズムはその「厳密な順序 ordre とシステム的な［遺漏なき］性格」（MM227-228）を通じて、「物体 corps」の構成に直結するものだ。

「感官の教育」の目的は、「私の感官を互いに調和させ、［中略］それらの与件の間に連続性を回復し、物質的対象の全体を近似的に再構成すること」（MM198）であった。言い換えれば、「感官の教育」の結果、与えられた部分的諸印象は、それ自体で閉じた一与件をなすのではなく、ただちに潜在的運動（いわゆる「生まれつつある運動」）などとの関係に入る。その印象が促す私の運動、あるいはその運動によって規定されるであろう他の諸印象、そうした「予期」的な諸要素が、当の印象の周囲に一挙に組織される[12]。最初の印象は、それが発動する感覚-運動的な一定の構造＝「繋がり connexion の総体」、身体的に了解される「どうすればどうなる」といった諸可能性のシステムに即して、理解

11）Cf. ***Cours III***, pp.158-159（***Leçon sur la critique de la raison pure***）.
そこでベルクソンは真のカテゴリーは関係のカテゴリーだけなのではないか、という（ショーペンハウアーの）観点を提示している。つまり、ベルクソンの理解では、客観的で非人称的な認識を可能にするのがカテゴリーの機能であるとすれば、そのために不可欠なのは、関係 relation のカテゴリー、特に因果性 causalité のそれだけなのではないか、というわけだ。「実際、悟性の役割が経験の諸対象の間でそれらを知解可能なものとする結合を打ち立てるということなのであれば、その結合を打ち立てるためには因果性で必要十分なのだと言えよう」（***ibid.***, p.159）。

12）「先立つ諸運動の中での、後続する諸運動の前駆的形成 préformation、部分が潜在的に全体を含むようにする前駆的形成……」（MM240）

されるわけだ。こうして例えばその印象はある物体の一側面として、他の諸側面を指示するものとなる。ところで、ベルクソンが「物体 corps」と呼んだのは、他ならぬ「抵抗と色彩、つまり触覚と視覚の与件が中核をなす、諸性質のシステム」(MM332) のことであった。となると、こう言ってもよいだろう、こうして「イマージュの総体」はさまざまの「物体」へと組織化されていくが、それは同時に、「イマージュの総体」の内部での「秩序」の認知でもある、と。私の動く身体をも込みにした広い意味での「因果性」の体系が、個体化されたもろもろのイマージュの中に、間に、背後に、張り巡らされていく。またおそらくは、「私の身体」という一イマージュもまた、限定された輪郭を有するものとして成立し、イマージュの総体の中に「内／外」という区分が際だたされてくるだろう。この区分もまた（後に疑似問題の発端を形成してしまうものではあれ)、外的世界の「外在性」の成素の一つであった（MM196, 206. cf. *Cours II*, pp.337-338, M410-412)。こうして、イマージュの総体として最初から一挙に与えられていた世界は、私の身体――「共働化＝共秩序化 coordination」として機能する身体――との関係において「物体 corps」の集合としてあらためて構成され、さらにその世界の中心に、その機能が局在するところの「身体 corps」という物体が、いわゆる「客観的身体」として、同時に構成されてくる。

習慣の時間――現在

しかしここでいったん考察を中断せねばならない。私たちは今、奇妙に矛盾した話をしているのかもしれない。カントにおいて客観的世界の成立を根拠づけていたのがカテゴリーとその適用であったのに対し、ベルクソンは身体的諸機能に訴えた。その点では両者の議論の水準は全く異なるものである。しかし秩序づけられた感覚ないし形式化された質料として、したがって知解可能な領域として、「自然」――少なくとも『物質と記憶』がもっぱら扱う「物質界」――を考えるその発想においては、大した差はない。動き、感じ、習慣をそなえつつイマージュを組織化していくベルクソン的身体は、世界のただ中で立ち働く“生けるカテゴリー”、いやむしろ機能である限りにおいて“図式”といったものとして理解することすらできるはずだ。実際、「図式」とはベルクソンが身体の機能を叙述する際に用いていた語彙だった[13]。

しかし、である。感覚-運動的身体を舞台とした諸印象の「共働化」、ないし「教育」を経た感官が、外的世界を秩序づけるのだとしたら、それこそ例の「観念論」の構図そのままではないか。カテゴリーや図式が身体化されたとしても、議論の本質には変わりがないではないか。「感官の教育」が成功するためには、諸印象が初めから一定の秩序を有していなければならないのであり、その客観的秩序こそが「感官の教育」がそもそも可能である条件だった――そうベルクソンは主張していたのではなかったか。実際、ごく常識的に言って、それ自身秩序だった諸印象（それゆえに反復可能な諸印象）に曝されているからこそ、身体は習慣を身につけることができているのではないのか。それが今や忘れられ、身体の側が秩序の根拠の資格をもっぱら担うというのはどういうことなのか。

13）ここで問題になっているのは「運動図式 schème moteur」である。「動的図式 schéma dynamique」ではない。両者は別のものである。前者はある感覚に対する身体的反応の現実的総体であるのに対し、後者は潜在的な諸関係を含む動的＝潜勢的 dynamique な、より心的な構造体を意味する。

この点については、いくつかの側面から論じることができるだろう。主客の適合（accord）としての「秩序」の由来を論じるという角度からすれば、先に触れたように『創造的進化』第三章の「同時発生」説が答を与えることとなるだろう。しかし目下の観点においては、ごく一般的な「空間性」における適合をしか保証しない『進化』の議論は、重要ではあれ、十分なものではない。そこで、次の点を指摘することもできよう。すなわち、身体が周囲の世界を世界として秩序立てるその際の「秩序」は、周囲のイマージュに潜在的に含まれているだろう秩序そのものに対して一定のずれをもっているという点だ。身体が習慣の形で所有し演じる感覚-運動的な秩序は、確かに周囲のイマージュの秩序性によって可能になったものであるとは言え、身体は後者の秩序をただ反映し写し取ったわけではなく、そこには選択と補足が介入しているのであり、その限りで身体による秩序化は、周囲のイマージュによって可能にされつつも、それを超過するものとしてなされるのだ、というわけだ[14]。

そうした方向へと議論を続けることもそれぞれに興味深いものだが、ここでは別のいっそう重要な事柄を指摘しておきたい。すなわち、身体ないしその「感覚-運動系」に与えられた時間的様態、その特殊性である。

習慣を身につけること、確かにそれは継起的な時間、一定の歴史の中で生じることだ。その限りで、習慣は外から与えられる諸条件に依存し、ある程度まで外界の所産の性格を持つものであると言わざるを得ないだろう。しかし、習慣の成立は、そうした過程の忘却と一体をなしている。「実際、いったん習得された学課は、過去におけるその起源や学習過程を洩らしてしまうような痕跡を全くとどめていない。それは歩いたりものを書いたりする私の習慣と同じ資格で、私の現在の一部分をなしてしまっている。［中略］……私がそれを学ぼうとして何度も行った読みを表象の形で同時に想起しようと思わなかったとしたら、私はそれを生得的なもの innée だとも思ったことだろう」（MM226-227）。忘却が構成する生得性。錯覚だろうか。しかしベルクソンは今問題になっている事態をそのような錯覚として解体するような種類の記述を行ってはいない。むしろ彼はこう述べるのだ、こうした時間的様相は、単なる誤謬として捨てられるわけではなく、「身体のうちに位置づくところの、ある全く別種の経験 expérience d'un tout autre ordre」（MM227）を積極的に構成するものなのだ、と。一定の受動性においておそらくは学ばれてきたという自らの歴史はそこでは消えうせる。「我々の過去の生とは無縁なものとなり」、その意味で、「時間の外に出ていく sortir du temps」（MM229）というのが、習慣に本質的な、習慣を構成する時間性であるとベルクソンは指摘しているのだ。実際、「習慣」という

14）私たちが世界において見出す法則的秩序は世界の中にそのままの形で存在し、私たちはそれをただ写し取るのである、といった考え方に関しては、ベルクソンは総じて否定的である。詳細は省略するが、法則は私たちが勝手に構成するものではないにしても、ある種の規約性を孕んでいる、というのが彼の見解に近いだろう。

ついでながら、この問題は、「科学の客観的価値」をめぐる当時の議論に直結することも指摘しておきたい。科学の真理性が、主観の規約によって初めてそれと規定されるものであるなら、極端に言えば、科学は主観的な構成物になる（ル・ロワ的規約主義、唯名論）。それに対して、自然そのものが科学的秩序をあらかじめ含んでいるのであり、法則の発見も、そして規約の適用すらも、その実在的秩序に基づいているのだという実在論的反論がなされたわけだ。実際、ル・ロワの議論は『物質と記憶』から生じているのであり、それは結果的に『物質と記憶』の諸議論が規約主義的・観念論的・唯名論的な傾きを有するものであったことを証している（そうした含意が明白な形で展開されたものとして、E. Le Roy, "Sur quelques objections adressées à la nouvelle philosophie" (1-2), in ***Revue de métaphysique et de morale,*** (1)1901, pp.292-327, (2)1901, pp.407-432.）。『物質と記憶』のベルクソンは、おそらく意図せずに、しかし自らが否定するはずだったカント的な（ある意味でカント以上の）主観的構成主義に陥っていたのではないか、という疑いがここから生じると共に、なぜ『創造的進化』が科学的認識の可能性をあらためて論じなければならなかったかについての見通しもまた示唆されてこよう。

ものがある積極的かつ実在的な現象であるのと少なくとも同程度には、その時間性もまた実在的なものであると言うべきではないだろうか。そしてそうした時間性は、『物質と記憶』においては「私の現在 mon present」と名づけられている[15]。

とするとどうか。習慣と呼ばれる身体の「感覚-運動系」の変様は、実際には身体と諸イマージュとの相互作用を通じて、そして多くは諸イマージュのイニシアティヴの下で、形成されてきたのではあるだろう。ところがそれが機能する時には、そうした過程は既に忘却されているのだ。この忘却を条件として、習慣はまさに「私の」能力となっているのではないか。歩くこと、ものを書く・描くこと、方向を定めること、言語を分節して聞き取ること。思うままにならず捉えどころもなかったものたちが、それでも私において習慣を形成し、私の身体的な「予期」の形を整え、そこからして逆に私の能力に服し、私の「予期」に適合したものとして取り押さえられること。私たちは習慣を身につける contracter が、その時には習慣の背後の歴史が、そして習慣を取り巻いてきただろう「外」が、表象としては忘却されつつも、行為としては習慣という「私の現在」の内に収縮 contracter され演じ jouer られているのだ。ここには、習慣を転換点とする内と外の奇妙な反転、その固有の時間性を通じての習慣の主体化・能力化が見出されると、そう言うべきではないか。あたかも、この身体としての「私」、すなわち身体的な仕方で絶えず再認を予期しつつ動く「私」が、秩序や形式を蒙るのではなく、むしろ積極的かつ能動的に「知覚の質料性 matérialitéを変様し」(MM254)、「規定された形式［形態 forme］へと実在の流れを結晶化」(EC504) しているかのように、そのようにことは進んでいくのではないか。こう言ってよいなら、自らの受動性を記す歴史を忘却することで、おのれに刻まれた習慣はむしろ私固有の能動性、能力として捉え返されているのではないか[16]。

先に述べたような「物体」の構成、そしてそれら「物体」がそこから際だってくる地としての「世界」の構成は、かくしてやはり身体の力能の相関物として理解されることになる。私の世界とは、私の身体がそこで自ら動きつつ渉猟するフィールドなのだ。身体の力能の相関物として、世界という滑らかな地平が構成され、あれこれの諸事物はその上に描かれる。身体の個々の志向が時に失敗するとしても、もはやそれは身体的予期の地平の内部[17]においてしか生じ得ないローカルな出来事にしか過ぎないことだろう。

---

15)「私の現在 mon présent とは、本質からいって、感覚-運動的なものなのだ」(MM281)

16) もちろん一つの本質的な問いがここでは残されたままだ。すなわち、その私の能力はそもそもどこから生じるのか、と。ここではあらゆる考察を省略し、次のように答えておくことしかできない――「持続からである」と。

17) 空間的な地平の開けが、近接する未来の相関物であることについてはMM286。なおこの「近接 prochain」が意味するのは、ここで問題になる未来が表象的予期のそれであるよりも、感覚-運動的身体の時間の厚みの成素としての未来なのだということであろう。

再認する生　2

――私は厚みをもった具体的な「私の現在」を有している。その厚みは、一方では感覚質の厚み、私の持続のリズムに即して物質の持続が「収縮」されることによる厚みであり、そして他方でそれは、私の感覚-運動系の所有する時間的幅でもある[18]。「具体的な現在」（MM 280 , 291 ）、それはもはや「未来を浸食していく過去の捉えがたい insaisissable 進行」（MM 291 ）、「既に存在しない直接的過去といまだ存在しない直接的未来との間の逃げ去っていく fuyante 境界」（ES 917 - 918 ）といったものではない。今や「生成」のうちに、「私の現在」という、眼前に捉えられた存在相（ present = prae-esse ）、行為への手がかり（ maintenant = main-tenir ）が生まれようとしている。こうして「生成 devenir」は「使用可能な事物 chose utilisable」（MM 327 ）に変じる。それと共に、過ぎ去ってしまった現在としての過去、まだ到来していない現在としての未来という次元によって時間が了解される素地が用意されてくる。「現在」という等質的エレメントの上で三つの次元に分節された時間、クロノス。

同時に、分節されないまま相互作用に共鳴していたイマージュの総体の「具体的延長」の中に、分節された諸々の秩序の線が、そしてそれらを通底するマトリックスとしての空間が、析出してくる。

再認された秩序――親しい外

先に確認したところによれば、「外的世界」の外在性はその「秩序」に存した。今やその「秩序」が与えられつつある。『物質と記憶』の第一章は、イマージュが組み込まれ得る二つのシステムとして、科学（脱中心化的システム）と知覚（私の身体に相対的なパースペクティヴ的システム）とを相互に媒介不可能なものとして立てていた。しかし感覚-運動的共働化を通じて、知覚は科学に媒介可能なものになっていくはずである。ベルクソン自身はその点を主題化していないし、また二つのシステムの区別がベルクソンの議論の中で正確に言ってどのような役割を担っているかは突き詰めればいささか難解なところである。しかし次のような考察を加えることは可能であろう。例えば立方体は私にとって、私の身体のあり方に応じてさまざまな仕方で与えられるものだが、しかしその与えられ方の秩序が次第に把握されるにつれて、私には客観的な立方体が現れてくる。私の採る視点などに左右される諸印象の変化が、むしろその関数として理解されるような、そのような一般的構造体として、立方体は理解されてくるわけだ。今はこの視点から眺めるからこう見えているが、別の場所からならかくかくのように見えるだろう、こう触ればこうなるだろう、等々、そういった対応諸関係は、やがて特定の視点に依存しない規定を有するものとして、理解されてこよう。客観的立方体の周囲には可能的な観察者たちが相関者として組織され、今私の視点はその一つを現実化しているに過ぎないのだ、という仕方で私の知覚は脱中心化していくのだと言ってもよい。もちろん、視点の選択と与えられるプロフィールとのいささか幾何学的な相関関係だけが重要なのではない。私の身体のさまざまな可能

18）解釈上の困難を指摘しておかねばならない。概念的にはこの二つ（収縮された物質としての感覚質の厚みと、感覚運動系の所有する時間）とは別のものだと思われるのだが、しかしベルクソンが議論の極めて重要な箇所――『物質と記憶』の議論の頂点の一つ――において両者を同一視し、それによって議論を進めていることはさしあたり否定できない事実だ（cf.MM291-293. そこでベルクソンは、習慣的記憶と独立的記憶の結合、すなわち心身結合を語り、それを円錐の図式によって叙述し始める）。彼の議論の歩みとその正当性は、それとしてさらに綿密な分析にかけられねばならないだろう。

性に呼応する諸構造が成立していることが本質的なのだ。しかるに、それこそまさに「秩序」の成立ではなかったか。こうして私たちは、世界が客観的な「外的」世界として捉えられてくることと、その世界が言わば私たちが身体で親しんだ世界として現れてくることとが、同じ一つの事柄なのではないか、と考えることができるようになる。言い換えるなら、以上のようにして与えられてくる「外界」とは、初めから、再認された親しい世界なのである。

『物質と記憶』の再認論において身体の「感覚-運動」性が担っていた機能は周知のものだ。観念論が望んだように再認において「精神に絶対的な自律性を与える」ことはできない。「感覚-運動的平衡のわずかな乱れに、注意や記憶の深刻な障害が続く」という事実があるのだから（MM252）。また、再認ははっきりした意識的比較によっては成立しないという事実も容易に観察できるものである。「類似なるものが、精神の結びつける諸項、したがって精神が既に持ち合わせている諸項の間の関係であるとしたら、そういった類似の知覚は、連合の原因であるよりはむしろ結果である」（MM236）わけだ。したがって、経験からも、そして理論上からも、表象の関係付けに先立つところのある再認が要求されることになる。実際、記憶像が現れるのは、普通は、知覚が既知のものと気づかれたその後であるのだから。そこでベルクソンは言う、「まず極限において、瞬間における再認、いかなる顕在的な記憶像も介入することなく身体のみでなし得る再認がある」（MM238）、と。これは具体的には「馴染み familialité の感情」として現れ、そしてその基礎はまさに「感覚-運動」性の中に、「うまく調節された運動的随伴ないし組織された運動的反応についての意識」（MM239）に、見出される。つまり、習慣的な仕方で身体が馴染んでいるということが、あらゆる再認の最初の条件であるわけだ。ベルクソンにおいても、習慣 habitus、能力として持つこと habere、親しい世界に住むこと habitare の三つの事柄は密接な繋がりにおいて理解されていると言ってもよい。

なお補足しておこう。この「馴染み」は、確かに「私の身体」と不可分なものではあるが、その上で喚起されるだろう私の個人的なあれこれの記憶に対立的な意味においては「非個人的＝非人称的 impersonnel」な性格を持っている。「この第一種の再認の特徴は、それが特定の個人的な状況の想起を排除することである。私の仕事部屋、机、本たちが私の周囲に馴染みの雰囲気 atmosphère de familialitéを醸し出すのは、それらが私の歴史の特定の出来事を思い出させない場合のみである。それらがかつて関わった出来事の正確な記憶が呼び起こされるにしても、その再認は第一のものにつけ加わってくるものであり、個人的なものが非個人的なものから区別されるように、あくまで別のものなのである」（ES922）。こうした意味で、この「身体のみでなしうる再認」とは、ある状況への身体的はまり込みであり、ことさらな意識化・問題化を排除する方向性を有している。そして私の生の日常性はまさにここに成立している。「我々の日々の生活は諸対象の間で営まれるが、それらは、それがあるだけで既に我々にある役割 rôle を演じるよう誘うような種類のものである。そうした諸対象の馴染みの相貌 aspect de familialité は、そこから来る」（MM240）。身体の「感覚-運動」性の回路に入ることによって、印象は可能的諸運動の地平に取り巻かれ、それと相関的に、例えば「仕事部屋や机、本たち」といった日常を構成するものたちは、言わば私に絶えず自らの扱い方を指示し、同時にその私自身をも“この対象をしかるべく扱う者”として、そうした広い意味での「役割」の下に、示し返すわけだ。言い換えれば、身体的に馴染まれることで、イマージュの総体は「外的」世界として認知されると同時に、私にとっての使用物としての対象の体系となり[19]、相関的に私をもその「使用者」

19）「日常の対象を再認するということは、とりわけ**それを使用できる** savoir s'en servir ということである」（MM239）

という「役割」において規定し返してくるものとなる。しかもその「使用」といい「使用者」といい、この段階ではいまだ単に「非個人的＝非人称的」な意味でのそれでしかない。今私たちがその発生を擬似的に辿っている「外的」世界は、特定の人称的な「誰」をも含まない形で構造化された使用物の体系としての性格をも持つわけだ。もちろんこの体系をただちに文化的な共通世界であると断定することは、『物質と記憶』の段階においてはいささか強引な解釈となろう。しかし既にそうした展開に向けての枠は準備されている。そうした共通世界において、そこにひしめく再認可能な諸事物に立混ざりながら私たち自身もまた事物と化していくといった事態を、『試論』は既に容赦なく描き出していた。それをやがて『二源泉』が社会の類型論の文脈において採り上げ直すはずだ。ただ、そうした見やすい展開を「疎外論」などと名づけ直しながら辿ることは当面の課題ではない。ベルクソンにおいて、身体のみによる再認はいまだ「再認する生」のごく一部、その最初の段階を占めるものでしかなかった。私たちはさらに論を進め、ベルクソンが「再認する生」に対して与える記述の全体を確認しなければならない。私たちは続いて「注意的再認」という場面の考察に導かれる。

代置としての注意的再認

身体のみによる「感覚-運動」的再認に、別の再認、すなわち「観念-運動」的再認、あるいは「注意的再認・知的再認」――すなわち「完全な再認、十全に自らを意識するに至った再認」（MM261）――が加わってくる。その時生じているのはいかなる事態であったろうか。

まず押さえておくべきは、ベルクソンが「注意的再認」と呼んでいるものは、単に過去のあれこれの事象との同定、あるいはそうした事象との類似の把握に尽きるものではない、という点だ。それは、最も広い意味において、与えられた知覚を解釈し理解することなのである。「より一般的に言えば、注意をするということ、知的な意味で［身体によってのみならず、の意］再認するということ、解釈すること、これらはただ一つの同じ作用である……」（MM261）。注意によって、漠然とした知覚は（強度において高まるよりはむしろ）そのディテールを補足され、あるいはそれが位置づけられる地平ないしコンテクストを与えられ、さらに判明なものとなっていく。そうして具体的には、文字がそれとして読まれたり、文章や数式の意味が理解されたりすることになるわけだ。

では、そうした解釈や理解はいかになされるのか。ベルクソンの特色あるテーゼはよく知られていよう。すなわち、そうした解釈や理解はもっぱら、その本質的な部分において、遠心的な努力である、という主張である。注意的再認とは、「反射、すなわち対象と同一か類似の、能動的に創造されたイマージュを外的に投射すること projection extérieure」（MM248）である。言い換えれば、例えばひとの話を聞き取る時には、私たちは音から出発するのではなく、むしろ意味から出発するのだ[20]。後に「知的努力」を扱った論文が強調したように、解釈すべき形態や音は単なる方向指示器のようなものであり、私たちはあくまで意味ないし「図式」から出発して、当の形態や音に辿り着くのでなければならない[21]。もちろん再認はそういった一方的な一度きりの遠心的作用に尽きるはずはない。実際には、絶えずこちらからの仮説的解釈が知覚に照らし合わされ、またさらに仮説が……というやりと

20）「聴き手は一気に対応する諸観念のただ中に身を置く……」（MM261）
21）「我々が形態や音を再構成する導きとなるものは、何よりも意味 sens であるのでなければならない」（ES944）

りがある。その限りで、ここにあるのは構成済みの知覚から参照されるべき諸記憶へ向かう一方向的な運動ではなく、むしろ「円環 cercle」「回路 circuit」(MM249, 250, 261) と形容すべき一連の過程なのだとさしあたりは言うべきだ[22]。あるいはさらに常識的な記述をすればこうも言えよう――「判明な知覚というものは、反対方向の二つの流れによって引き起こされるもので、つまりその一方は外的対象からやってくる求心的なものであり、他方は我々が『純粋記憶』と呼ぶものを出発点とする遠心的なものだと。[中略] これらの二つの流れは出会い、そして判明かつ再認された知覚を、両者が結びつくその場所で、形成するのである」(MM272)。注意的再認の過程において私たちは絶えず、繰り返し、「対象そのものに立ち帰らねばならない」(MM249) わけだ。

それはそうだろう。しかしそれにしても、「十全に自らを意識するに至った完全な再認」が成立するとはどういう事態なのか。注意的再認が目指す終局、再認を駆動しているテロスといったものがあるとすれば、それはいかなる事柄なのか。この点に関してベルクソンの主張は明晰だ。「ある計算を辿るということは、自分でそれを再び行う refaire ということだ。同様に他者の言葉を理解するというのは、諸観念から出発して、耳が知覚する音声の連続体を知的に再構成するということだ」(MM261)、「我々は、自分で par notre propre compte 計算を再び行う refaire ことなしにある計算を辿っていくことができるだろうか？ある問題の解を理解するのに、その問題を自分で a notre tour 解く以外の仕方があろうか？」(ES943)、「我々が読んだり聞いたりする文章が我々にとって完全な意味を持つようになるのは、我々が自分でその文章を再発見 retrouver し、言わば我々自身の手持ちから de notre propre fonds その文章が告げる数学的真理の表現を新たに創造できた時なのだ」(ES943) ……。「再び」、「自分で」、「自分から」――ちょうどプラトンの対話篇における少年が、幾何学の真理を自分のうちから、想起という形で獲得＝再発見したように、ベルクソンにおける再認も、最後は知覚の意味を私自身の中から引き出したと言えるような局面を目指し、またそれを実現していくものなのではないか。確かに再認という作用は、それが再認である限り、一方の極として再認の網をかぶせられるべき当の対象を有することは自明である。そしてその対象への参照は最初から最後まで手放されるものではない。しかし再認とはまさに、その対象を私の側から再構成し、かくして私のうちにその対象を見出し、同時に、その対象のうちに私自身の所産を認めるという営みのことだったではないのか。

実際、ベルクソンの言うところに従っても、再認作用は知覚に対立しつつ働くとは限らないのであり、その境界は実際には微妙なのである。確かに身体はそれなりに諸印象を構造化するが、それが既に十分に構造化され分節化された知覚を与え、その後に初めて注意的再認がそこに加わってくる、といった二つの作用の判然とした前後関係が必ずあるとは断言できないのだ。ちょうど科学的探求において、一般化や理論化に先だってまず単なる観察を行えるという想定が誤りであるように[23]――所与の観察そのもののためにも一定の仮説は不可欠の前件なのだ――、私たちの日常的な形態的知覚の構成にも多くの場合あらかじめ注意が介入していることが必要であるとベルクソンは述べている。「最初にまずものを見たり聞いたりして、しかる後に、既に知覚が構成済みとなってから、それを類

22)「我々の判明な知覚はまさに一つの閉じた円環 cercle ferme ――そこでは精神へと差し向けられる知覚イマージュと、空間へと投げ出される記憶イマージュとが互いの後を追うようになっている、そのような円環――にこそ比せられる」(MM 249)。「我々の記憶力が外的対象に対面した位置で次第に緊張を高めながら対象へと諸記憶を投射していくのにつれて、対象のほうでもそのいっそう深い諸部分を明かしてくるような、そうした回路」(MM 261)。

23) 典型的には、ベルナール論 (cf. PM1434-1435) を参照。

似の記憶と結びつけて再認するのだなどと考えるのは、再認のメカニズムを奇妙にも誤解することであろう。実を言えば、記憶こそが我々にものを見せ聞かせている faire voir et entendre のであり、知覚だけでは類似の記憶を喚起することはできないのである。喚起のためには知覚は既に形態をとっており十分に完全なものとなっていなければならないからである」（ES944）。

とすると、こうは言えないだろうか。注意的再認において、「再認」されるのは確かにそのつどの知覚的所与ではある。そして当の知覚が、個体同定的に（これはあの灰皿だ）、あるいは概念包摂的に（これは灰皿というものだ）、再認される。しかしそれは同時に、再認するこの私の、知覚対象における自己再認でもあるのだ、と。再認は一般に「BとしてのA」という置き換えの形を採るものだが、ベルクソンにとってこのBこそは、私たちの側に由来する「我々の人格の変様 modification de notre personne」（MM215）、すなわち「我々固有の基底 notre propre fond から引き出されてくる」もの、「我々の人格に属する nous appartenir personnellement」（MM214）ものであったはずだ。繰り返せば、再認は「投射」であり、私の側からの能動的な作用を意味する。注意的再認は受動的で機械的な作用などでないと言わんとするベルクソンにとっては、それは譲れない点だ。では、いかなる能動的作用なのか。「我々がある知覚から以前受け取ったイマージュを知覚の上に反射させるためには、我々はその知覚を再産出 reproduire できなければならない。つまり、ある綜合の努力によってそれを再構成 reconstruire できなければならないだろう」（MM247）――再産出、再構成。注意的再認とは、私は自ら産出し構成したものを、自らの眼前に投射し、重ね書きし、ついにはそれをもって知覚に代置することなのである。

事情がこうであるとすれば、注意的再認が目指す最終的な項は、確かに一方では十分に規定された対象の知覚、明晰で判明な対象的知覚であろうが、それは同時に、再認する私自身の自己再認なのだと言うべきではないか。対象を明晰に把握することがそのまま私への回帰であること。私自身への参照が、逆説的にも対象的実在を開示する条件であること[24]。この二重性は本質的なものだ。具体的には、この二重性は、明晰で判明なものとして、知覚は今や知解 intellection に適うもの、知解可能なもの intelligible となっているという事態において表現される。この知解可能性が意味するのは、その知覚が想起であり再認であること、私に由来するということ以外の何ものでもない。ここにおいて再

24）『物質と記憶』のテキストそのものが、この二重性を記述している。ここで念頭に置くべきは『物質と記憶』第二章に出てくる例のだるまのような図式（MM250）である。原初的な知覚をはさむ形で、記憶の諸円環と対象像の諸円環が対応している図であるわけだが、しかしその解釈は一筋縄ではいかない。最も興味深いのは、図式で言えば下側の点線が囲うものが何か、という点であろう。単純に考えれば、それは知覚に向かってこちらの記憶から「投射」したものであるはずだ。しかしベルクソンはそれを主観的投影物としては考えていない。奇妙に思われるが、しかし彼はそれをむしろ「実在のより深い層」（MM250）「[外的対象の] いっそう深い部分」（MM261）として記述しているのだ。それはテキスト解釈上認めざるを得ない。だがそもそもそうした「深い層」や「深い部分」は、記憶の努力による投射としても記述されていたはずだ。つまり、注意的再認において成り立つ具体的な知覚は、私の側のより明晰で判明な想起ないし再構成であると同時に、そのまま実在の側のより明晰で判明な把握でもあるかのごとく、ことは進むのである。

ただ、このように異質的なはずの両者を重ね書きしつつそこに何の矛盾も見ないことは、おそらくベルクソンの見落としであるよりは、再認というそれ自身両義的な事柄のより忠実な記述の結果だと言うべきだろう。例えば実際、私たちがひそかに聞こえる物音を努力して聞き取る時には、こちらの「構え」と聴覚的所与は、各々が二重化しないまま、単一のより明晰判明な「物音そのもの」を形成する。あるいは知人に気づく時、私たちはその人の観念と視覚所与という二つのものを意識するのではなく、単にその「知人本人」をそこに見る。

認の「円環」は観念論が実現される舞台となるだろう。

再認する生において、具体的知覚を構成する「円環」は、純粋な状態では全く異質なはずの知覚と記憶両者の差異を無としてしまう「混合体」、自らの混合性に気づかない統一体にまで生成する。「現勢的な［目下の］知覚を解釈し得る記憶イマージュはその知覚に非常にきっちりと滑り込むので、我々はもはや知覚であるものと記憶であるものとを区別できないほどである」（MM248-249）——知覚と記憶のこの判別不可能性、それは単なる虚偽や誤謬ではない。少なくとも観念論が有してきた一定の正当性[25]に釣り合うだけの実在性を、この判別不可能な統一体は、有しているはずだ。不純な統一体ではある。しかしこの統一体の構成こそが、私たちの日常の生、かの「生への注意 attention à la vie」が保とうとする「生」が絶えず目指しているまさにそのものなのだ。

再認の時間——現在、再び

こうして、「再認の時間」とでも言うべき時間が成立する。それは、私ならぬものが絶えず到来する時間ではないし、また、過去と未来に現在が絶えず分かたれていく差異化の時間でもない。私たちは先に、習慣が「私の現在」として時間的に規定されていることを見た。この「私の現在」の「私」性は、さしあたってそこにおいて私の主体的な能力が開示され機能するという点に存していたと言ってよい（『物質と記憶』が現在的知覚を初めから私が主導権を有する行為の関数として論じていたことが想起されよう）。言い換えれば、この「現在」という時間は、私と世界とが相互に映し合う場、より正確に言えば（習慣化において偏極化が生じるのだから）、世界において私がおのれを映し見る時間、つまりは既に再認の時間として持続の中で際だたせられたものだったのである。

忘れられてはならないが、こうした「現在」が成り立つことは、それ自身既に時間の内部に大きな転換を記すものだ。というのも、ベルクソン自身考察を加えているように、絶えず進行するものとしてのみ時間を考えれば、そこには過去と未来の間の理念的境界として以外には「現在」といったものは存在を持てないはずなのだから（cf. MM280, 291）。しかし、にも関わらず、私たちの生においては、「実在的で、具体的で、生きられた現在 présent réel, concret, vécu」（MM280）というものが確かにある——感覚-運動的身体の時間的様相として。しかもこの「現在」において生じていたのは「外」の「内」化、具体的には習慣として理解されるところの、外的な諸力の固有化であった。「現在」とは、そうした二重の逆説の場なのだ。時間論的には、ある「留まり」の成立であり、自我論的には、ある「能動性」の成立であるこの「現在」、ここに初めて再認は可能になっていたわけだ。実際、再認とは、流れ去るだけの時間に抵抗しつつ過去を今ここへ回収することであり、そして同時に、蒙るだけであった所与をこちらから規定し把握することではないか。そこにおいて、直線でイメージされもするような時間は縺れ、錯綜し始める。そして、中心なき相互作用の拡がりは窪みを受け入れ、そこには力能の主体が宿り始める。「現在」とは、一見したところとは反対に、そうした複雑で逆説的な事態を意味する時間の名なのだ。そしてこの「現在」こそは、「再認する生」の場所に他ならない。身体的再認についての考察が示唆したそうした論点は、注意的再認をめぐる考察において捨て去られただろうか。それともむしろ同じ方向へさらに延長されただろうか。

25）cf. *Cours II*, pp.331-332.

答は既にほとんど明らかであるが、ここで興味深いのは、身体の「現在」を離れて記憶力 mémoire [26] に論を進めたベルクソンが、相変わらず「現在」の語を用いていることである。奇妙な事態である。ある見方からすれば、ベルクソンが「記憶力」の名において論じたのは、身体的・物質的・顕在的な「現在」に還元不可能な、心理的・精神的・潜在的な存在であったはずである。にも関わらず、それが相変わらず「現在」の語によって記述されているのだ。実際、記憶力は「常に全体として自らに現前している toujours présente toute entière à elle-même」（MM310）のであり、注意的再認とは、そうした記憶力が、知覚に触れながらも、自らその知覚を「再構成」し、知覚の知解可能性において自らを再認し続ける、そうした過程であったわけだ。記憶力と注意的再認における、「現在」という時間性の回帰。もしここでベルクソンがあからさまな不注意と非一貫性に自らを委ねているのでないとするなら、身体的再認と、注意的再認とは、基本的には同種の作用として連続的に理解されなければならない。身体的再認の習慣的作用に注意や努力が介入することは、それなりに重要な段階を記すものではあれ、再認そのもののロジックを破る性格のものでは全くないわけだ。

こう考えてくると、「生への注意」の関わる領域としてベルクソンが描き出した例の円錐の図式は、身体的「現在」と、再認する記憶力の「現在」との連続性を図示したものとして了解されてくる。その両者はまさに一つの円錐の中に統合されているのであり、そもそも両者の連続性が円錐の図式を設定する可能性を保証していたというわけである。言い換えれば、身体の現在と記憶力の現在は、実は地続きのものであり、再認の「円環」の内部で同心円状に重ねられるものであったのではないか。事実、これまで見てきた諸段階において、同一の構図が反復されていたことが気づかれるはずだ。まだ普通の意味で「再認」とは言えない、意識的知覚そのものの発生の時点においても、実は既に私の非決定性と周囲の知覚とは相互反射的関係のうちにあった。習慣とそれによる再認（秩序の認知）の成立においても、習慣の成立とイマージュたちの整序化とは相関的であり、馴染みの世界において私の身体は自らの能力を世界の分節として映し見るのであった。注意的再認においてもまた、再認された対象の上に私が見ることになるのは、私から発するものであり、つまりは私自身の反映像なのだ。再認の諸段階いずれにおいても、私は絶えず私から出発し、私に還帰する――不可逆で創造的であったはずの「持続」のうちにありながら、そして私ならぬ「外的」世界にさらされながら。今やこう言ってよいだろう――「現在」とはそうした回帰を約束する時間だったのだ、と。ある意味では異質なはずのそれらの諸段階において、ベルクソンの叙述に「反射・反映 réfléchir, refléter, réflexion」や「鏡 miroir」[27] の語が常につきまとっていること――これは、決してどうでもいい事実ではない。水準を変えながら記述されているのは、再認する生の基本性格、他に関わりながらもそこに自らの反映を見るという性格なのであり、この事象そのもののロジックに導かれつつベルクソンのペンの下には繰り返し「反射」や「鏡」の語が現れるのだ、と言うべきだろう。

『物質と記憶』全体が描いてみせるのは、以上のような「再認する生」の諸相であった。「再認する

26）記憶力 mémoire が常にある仕方で「現前 présente」していることについては MM250, 287-289 も参照。記憶の総体の「現前」性についてはMM241。

27）純粋知覚と「反射」については註３。注意的再認が「反射」であることに関してはMM248-250。身体的な再認についてはそれは「反射 réflexe」として形容されはするが（MM231, 239）、「物体 corps」への分節化が身体的能力の「鏡による par un miroir」ごとき反映であることについてはむしろEC504を参照。そもそも「空間」というものが、恣意的な分割と再構成を行う私たちの能力（pouvoir, faculté）を外界に「投影 projeter」したもの、その能力を「象徴 symboliser」するものであることについてはEC628。

生」、すなわちさまざまな大きさの「円環」において、絶えず「外」と関わりながらもそこにおいて他ならぬ自分自身を観照する生。円錐のさまざまな平面を経由しながら、「実在」との接触をそれでも再認の対象とし、自らに固有な「再認の時間」のうちで生きる生。この時間においては、あたかもすべては「私の固有の基底」から生じてくるように、あたかも私から由来するように、ことは進む。観念論の時間、プラトン的『想起』の時間。しかし、世界という場所に自らの位置を見出す生は、そうした時間の窪みないし縺れとしてのみ、自らを保ち得るのだ。

実際、どうして別様であり得ただろう？「外」から絶えず新しい何かが与えられ、しかも時間は単に直線的なものであり、そして記憶力としての私は常にそれに遅れるのであったとしたら、いかにして私は受動的な所産という場所から抜け出すことができただろう？『試論』の比喩的語群を転用しつつ言えば、いかにして私は、絶えず外から雫が与えられることによって受動的に変様させられ続ける池のようなもの、次々と加わってくる音のために全体的相貌を変様させられてしまうメロディーのようなものであることを止め得ただろう？そのような境位において、いかにして私の「自由」——私というものがあり、そしてその私を作者（auteur, DI109）とするような何かが生じること——が可能であったことだろう？方法は一つだ。たとえ外から何かが与えられるのだとしても、それは実は私自身の何かなのだと逆転を試みること。『試論』は既に「同化 assimiler」の語を幾度も口にしていた。外から与えられた諸要因、教育や遺伝、気質などといった、常識的には私の自由を脅かすだろうものに対して、ベルクソンは何を語っていたか。見逃しようはないだろう、彼は決してそうした要素の排除をいっさい口にしてはいないのだ。彼はむしろ、そうしたものの「同化」を通じて自由を保つことについて語っていたのである（DI110,113-114）。逆説的な主張だ。外から与えられるものがどうして私の自由に統合されるというのか？しかしこの逆説ないし矛盾を現実化するものこそ、再認なのだ。再認において、外から与えられたはずのものは、親しい馴染みの相貌を纏い、その異他性を失う。それは具体的には、時間のあるねじれないし逆転によってなされるしかあるまい。「あたかも私から」の時間。しかしこの「あたかも」こそ、世界における私の内面性を支える時間なのではないか。それをあえて仮象と呼ぼうというのなら呼んでもいい。しかしそれは生きられた仮象なのであり、私たちの「通常の生」はその仮象としてこそ成り立っているのだと言わねばならない——実際に私たちが日々習慣を機能させ、注意的再認を行い続けている以上は。矛盾だと言うのなら、しかしそれこそ私たちが日々生きている矛盾なのだと言おう。実際、ベルクソンも述べていたではないか——知覚において私たちは自分自身の状態と、自分とは区別される独立の実在とを、同時に把握する。これは確かに「実在となった明白な矛盾 apparence de contradiction réalisée」と呼ばれるべき事態だが、しかしそうした「混合的性格」は「我々の直接的知覚」のそれなのだ、と（MM339）。例えばここに記される「直接的な混合性」とでも言うべき微妙な位相、そこにおいて私たちの「通常の生」は営まれている。『物質と記憶』という著作がその全体を通じて浮き彫りにしているのは、こうした事態であった。

再認する生　3

――「生への注意」を存分に発揮しつつ、私は自分に馴染みの世界、「我なしあたう je peux」に絶えず応えてくれる世界に住まい、世界のさまざまな相貌の上に自分自身が映し出されるのを看てとる。その世界の「外在性」は、そこに私が再認する秩序によって保証され、そうした秩序としてやはり馴染みのものとして生きられ了解されている。悟性概念の下で再認可能な領野のうちに世界を囲い込むカントの理論理性のように、そして世界の客観的秩序の把握でしかないラシュリエの思惟のように、ベルクソン的な「再認する生」は知解可能な世界において進行する。生きられた観念論。

再認の彼方——結びにかえて

以上、ベルクソンが「再認する生」について加えた記述を辿ってきたわけだが、しかしそうした記述をなしえたベルクソンこそは、そうした「再認する生」の外部をもまた最もよく知る哲学者であったに違いない。最初に確認したように、もし「形而上学」が——哲学が——可能であるのなら、私たちは再認の円環に安らうことはできないことになろう。形而上学的な経験があるとすればそれは、容赦なく「再認する生」を脱臼させ、無力に陥れるものであることだろう。しかもそれは、その「生」の内部のローカルで回収可能な失敗ではなく、その「生」のあり方そのものを根底から脅かすような体験であることだろう。こうして、私たちはベルクソン哲学の本筋に立ち戻り、その積極的諸要素をあらためて検討し直すことができるようになる。ここでは特に以下二つの点に触れておきたい。

第一に、「私」すなわち主観性の問題。再認する生において、私はおのれを世界に照らして、その限りで、知る。あれこれの再認可能な事態をそれとして知り、理解し、使用できる者として、さらには直接的にあれこれの再認可能な「事物」(名前、役割……)として。本性上比喩的なこの事態をさらに比喩的に言うことが許されるなら、世界は私が何ものであるかをさまざまな言葉で記した書物であり、世界は私についての解釈学的な理解の場を構成するものなのだ、と言い換えてもよい。「私」は、世界を経巡りながらその中で、再認可能という意味での同一性—— « ipséité » ならぬ « mêmeté » ——を自らも具え、世界という書物の中に書き込まれ、そうしたものとして存在を許されるだろう。疎隔化と了解の二重の運動としての主観性、回帰と不可分な脱自としての主観性。しかし、「私」の存在の本来の場所は、再認だろうか?「再認する生」の「生」それ自身までも、再認された生に尽くされてしまうものなのか?

ベルクソンに即する限り、そうであるはずはない。再認する生の中心には、もはやそれ自身再認の対象とならない生が存在する。そしてそれは世界を迂回し再認によって自己還帰を果たす以前に、既に「私」性を享受しつつ生きている。必要な諸考察を省略して述べるなら、それこそが、『試論』のベルクソンが「純粋持続」として提示した本源的な主観性であったのだと私たちは思う。「私」の存立様態とその与えられ方に関する理論、すなわち主観性の問題系からすれば、『試論』こそは最も深い書物なのであって、再認の場面を軸にして論述が行われた『物質と記憶』は、重要なものではあれ、『試論』に対しては補足的な位置をしか占めない。

最後にもう一つ、かの「直観」という概念について私たちも触れておきたい。既に気づかれるように「再認する生」の諸相は、『創造的進化』に至って「知性」と呼ばれるもののそれと大きく重なる。再認を本義とするゆえに、法則的秩序に安らぎを感じ、新しいものを既知のものに還元することしか求めない「知性」こそは、まさに「再認する生」の認識論的別名なのだと言ってよい。そして「再認する生」の外についての経験があるとすれば、その「知性」と常に対置される「直観」こそはそれでなければならない。その両者の対比をこれまでの叙述に重ね合わせつつ、私たちは「直観」についてより判明な特徴づけを得ることになるはずだ。

今や明らかなように、「直観」は、実在についての何か安定した視像のようなものではあり得ない(「vision よりもむしろ contact...」(PM1350))。少なくともそれは、私の眼前に、「使用可能」なものとして、「現在」的に示されるようなものではあり得ないことになる。直観が「共感 sym-pathie」としてパトス的=受動的でしかないというのはそういう意味だ。それは、私たちの方から掴み取れる対象に

は属さない。「背後に感じる衝迫を掴み取ろう saisir としてさっと振り返ってみても、それは姿を隠す。それはもの chose ではないからだ……」（PM1431）。そして、たとえあい変わらずそれに対して再認的に関わろうとしても、私たちは果てしのない作業、自分がそれを同化し支配するには決して至らない作業に巻き込まれるだけであろう。ベルクソンが記述する「哲学的直観」とはまさしくそうしたものであった――「その点には何か単純なもの、無限に単純なもの、比較を絶して単純であるがゆえに哲学者がついには言い当てられなかった何かがあります。それゆえに彼は一生涯語り続けたのです。心のうちに持つものを定式化しても、彼はただちにその定式を訂正しなければならないと感じ、ついでその訂正をもまた訂正しなければならないと感じます……」（PM1347）。再認しようがなく、「我なしあたう」には決して転換されないもの。私の言葉になってしまうことを拒み、むしろそれに触れてしまった者に「一生涯」語り続けさせるもの。それによってバークリがバークリになり、スピノザがスピノザになり、そしてベルクソンがベルクソンになったところのもの。ベルクソンが「哲学者の名に値する哲学者」（PM1350）と名づける特異な存在とは、「再認する生」の中に休らうことができず、「直観」に言わば襲われてしまい、かくして彼の生は以後この「直観」に駆動され続ける、そうした者のことなのだ。

本稿ではこれ以上詳細な検討は行うことはできないが、芸術的な直観についても、神秘的と言われる直観についても、おそらくは同様のことを語り得るはずだ。そしていずれの場合においても、再認されないものとして、直観が私たちを導く先は、新しいものの絶えざる湧出としての実在であることだろう。そこには「再認する生」の外が、すなわちベルクソン的「形而上学」の本来の領野が、私たちを待っている。

それにしても私たちは驚かざるを得ない――この一見穏やかで端整な哲学は、その核心において何と暴力に満ちたものであることだろうか。かつてル・ロワはその古典的研究書において、ベルクソン哲学が私たちに要求してくる「ほとんど暴力的な行為 acte presque violent」[28] について語っていたが、私たちはそれを文字通りに、いやそればかりかその「ほとんど」抜きに、受け取らねばならないのかもしれない。――しかし同時に忘れてはならないことがある。そう言うことによって私たちは、そしてもちろんベルクソンは、哲学を何やらわけの分からぬ恐ろしげな混沌へと差し向けようとしているわけでは全くない。また彼は「再認する生」のみを「生」と考え、「生」ならぬものとして否定的にその外部を立てているわけではない。ベルクソンの「生」ははじめから「再認される生」の外に位置づけられているのであって、彼は積極的にそれを出発点となし、また思考の、そして行為の、ノルムとするのだ。実際、ベルクソン哲学があらためてその異貌を示すに至ったこの点、「再認する生」が他でもない「生」自身によって容赦なく破られていくことになるこの点、哲学が私たちを導くだろうまさにこの地点に、「安寧 bien-être」や「快 plaisir」ではなく、「歓喜 joie」と名づけられるものが存在することを告げたのもまたベルクソンであった（PM1365）。

ベルクソン哲学が「生の哲学」であるとは今さら言うまでもないことである。しかし彼がさりげなくも「生」という語で指し示したものを今日の私たちが十分に理解し終えているのか――それは定かではないのだ。

28）E. Le Roy, ***La philosophie nouvelle. Henri Bergson,*** Alcan,1914, p.19.